
いばらのもりのねむりひめ

膾炙（錯覚）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いばらのもりのねむりひめ

【Nコード】

N0301S

【作者名】

膾炙（錯覚）

【あらすじ】

むかしむかしのあるところオーロラというお姫様がうんぬん
エステルさんは、どうやら童話の世界に迷い込んでしまったようで

むかしむかし、ある国のお城で、オーロラというお姫さまが生まれました。

王さまは国中の人をよんで、お祝いをしました。

お祝いには、十二人の魔法使いたちもやってきました。

ただとただ一人、十三人目の魔法使いだけは、お祝いによばれませんでした。

じつは、お城には魔法使いたちの使うお皿が、十二枚しかなかったからです。

それはあくまで名目で、本当は死を司る不吉な魔法使いを呼びたくなかったのです。

お祝いによばれた魔法使いたちは、つぎつぎに進み出て、お姫さまにおくり物をささげました。

「きれいな人に、なりますように」

「やさしい心でも、もてるといいねえ」

「あたしほどじゃないけどかしこくなりますよーに」

「ワウ　ワウ　ワオオオオオオオオン」

そして、十二人目の魔法使いが進み出たときです。

城中に、低い声がひびきました。

「よくもおれをのけ者にくれたな。姫よ、おれのおくり物を受けるがいい。おまえは十五才の誕生日に、つむにさされて死ぬのだ」

十三人目の魔法使いは、そういうと消えてしまいました。

「大変だ！　どうすればいいのだろう」

人々は、大さわぎです。

「ちよつと待つて。まだ、わたしが残っているわ」

そういったのは、十二人目の魔法使いでした。

「お姫さまは死にません。つむにさされても、百年の間眠るだけ」
「ただ、王さまは心配でたまりません。」

「国中のつむを1つ残らず集めて、燃やしてしまえ！　そして今後、つむを作ることも使うことも禁ずる」

命令を受けた人々は、つむを集めて火をつけました。

「これでよし。つむがなければ、姫もさされはしないだろう」

王さまも人々も、ホッとしました。

やがてお姫さまは、すすくと大きくなって十五才になりました。ある日の事です、お姫さまは一人でお城の中を歩いていました。いくつもの階段をのぼって見つけたのは、小さな入り口です。

「まあ、こんなところに部屋があつたなんて。・・・ここには、何があるのかしら？」

お姫さまは、古ぼけた部屋に入っていました。

中にいたのは、見たことがないおばあさんです。

おばあさんは糸をつむぐ車を、ブンブンと回していました。

「まあ、おもしろそう。おばあさん、ちょっとかしてくださいな」

「ああ、いいぜ、さあ、手をだしてみな」

何も知らないお姫さまは、つむぎ車に手をのばしました。

そのとたん、つむぎ車のつむが、お姫さまの手をさしてしまったのです。

「ク」

おばあさんは小さくわらうと、どこかへ消えてしまいました。

実は十三人目の魔法使いがおばあさんに化けて、お姫さまを待っていたのです。

つむの毒がお姫さまの体にまわる前、十二番目の魔法使いの魔法が始まりました。

お姫さまは魔法の光につつまれると、その場にバツタリと倒れて、そのまま眠ってしまったのです。

魔法の光はお姫さまだけでなく、お城全体をつつましました。

そのとたんに、お城の時計がピタリと止まりました。

ネズミを追いかけていたネコは、屋根の上で眠ってしまい、料理番は料理のとちゅうで眠りました。

いえ、それだけではありません。

なんと空を飛んでいるトリも空に浮いたままで眠り、料理をあたためていた火も眠ってしまったのです。

なにもかもが眠ったお城の回りで、イバラだけがのびていきました。

長い長い年月が流れました

■ 『眠れる森の美女』より一部抜粋及び改訂

むかしむかし、ある国のお城で、エステルというお姫さまが本を読んでいた。

夜の自由な時間に本を読むのは彼女の日課。今夜は特に物語に熱中していて、本来ならもう眠っている時間にもかかわらず日付が変わっていても眠りませんでした。

彼女の集中力は凄まじく、周りの変化に気づいていません。

机の上のカンテラはやさしく明かりを届けます。

年季がかかって黄ばんだ表紙には「眠れる森の美女」という文字が書かれています

机の上にひじをついて、前のめりになりながら物語を読み進めていきます。

『なにもかもが眠ったお城の回りで、イバラだけがのびていきまし

た。
』

さて、いよいよ承の部分が終わり、物語が大きく動く転のパートに差し掛かります。

『長い長い年月が流れました』

エステルは手に汗握りページをめくります
』

^
?
[

]

]

なんとも間抜けな声が出てしまいます。

次のページには何も書かれていませんでした。

乱丁かと思って次のページをめくってもまた一面の空白。

次もそのまた次も、そのさらにまた次も、ずっとずっと終わりまで何も書かれていませんでした。

おかしい話です。

これは城の図書室で借りたもの。ここまで大胆な乱丁があるとは考えにくいです。

それに、手の垢による本の腹の黄ばみは、最初から最後までずっと均質でした。

ということは、ずっと空白であろうとみんな最後まで淀みなく、さながらちゃんと物語の続きがあるように読んだということになります。

「どういふことなんです？」

ひとまず、明日になったら司書に訊こうと棚上げし、今日のところは眠ることにしました。

もつとも、もう日付が変わっているので明日ではなく今日なのですが。

本を閉じて、脇に抱え込みます。

そうして、本から目を離せば、なんということでしょう、そこはお城ではありませんでした

城の壁はどこにいったのか。

さながら五里先まで広がっていきそうな濃い霧。

まさしく、今のエステルの心情を表しています。

なにもかもがぼやけていて、辺りのものが何も見えません。ただ、踝まで伸びている草で、ここが草原だということを理解しました。

それで、何をどうしたら城の一室から草原に行くのでしょうか。それらしき兆候はありませんでした。

空間が繋がったような異変もありませんでした。

ただ、唐突に、映像が切り替わるように、草原に居たのです。まるでどこかのベタな小説のよう。

「どうでしょう」

定説にのつとれば、ここで助けを待つというのが無難です。

ですが、エステルはふらふらと、歩いてみることにしました。

こんな突飛な状況では助けは期待できなかったからです。

歩きます。歩きます。草原のやわらかさが心地いいです。

歩きます。歩きます。ぶれることなく真っ直ぐに。まるでこっちの水は甘いぞと誘われる蛍のように。

掻き分ける霧はくるとターン。再び体にまとわりつきます。

しばらく歩くと、茨が見えてきました。

雲に楔を打つかのように高く、地平線を舐めるように遠く、広がる様はまさしく森。

これだけ大きなものが剪定なんてされているわけもなく、あちらこちら棘だらけです。

何かを阻むように、守るように、蔓は絡まりあっています。

何より目を引いたのは、それがワインレッドだということでした。

珍しい種類です。エステルはそんな茨があるとは本から聞いていましたが実際に見るのは初めてでした。

イカアラカタ ビアラチノト ヒノクオオ デリドミ トモトモ

そして、さらに珍しいことにその茨は鼻が一回転してしまいそうなほどくさい臭いを放っていました。

外敵を寄せ付けないためでしょう

メタタツ スヲウユシ シノンサク タハトンホ ソウ

エステルは壁の向こうに行きたかったのですが、茨の森が邪魔で進めません。

手袋が棘に引っかからないように、壁に触れます。

上質の鞭のように柔らかさと硬さを併せ持っていて、押しのけてもすぐに戻ってきそうです。

茨同士は複雑に絡まりあっているものの、密度は薄く一見潜り抜けられそうです

あくまで一見。無理やり通り抜けようとすれば、身動きが取れなくなることに請け合いです。

そして、もがけばもがくほど体中にとげが刺さって、やがて命を落とすでしょう。

危険です。

明確な目的があるならともかく、何があるのかわからずなんとなく惹かれるから進んでいる程度で、この茨を掻き分け進むのは、あまりいいやり方とはいえません。

なら、壁沿いに歩いて、反対側に行こうと、手を茨につけたまま横を向いて、

………

電気が走りました。

茨から、腕を通じて、頭の中へ。

静電気でしょうか。

まさか、金属でもないのに流れるとはちょっと考えにくいです。

だとすれば、いったいなんなのでしょう。

エステルは、叫びだとりました。

勿論、エステルは植物の言葉なんてわかりませんし、茨も人間の言葉なんて持っていません。

それでも、エステルには助けてほしいという悲痛な叫びに聞こえたのです。

エステルは茨を助けることにしました。

でも、どうしたらいいのでしょうか。

何が、助かった状態なのか、何から助けてほしいのか、エステルにはさっぱりわかりません。

渦巻く頭。思い浮かんだのは昔の景色。

桜花舞い散るハルルの街。

その時はまだ桜は咲いていなくて、エステルで咲かせました。

今のエステルにそんな力はありません。

でも、その前に、パナシアボトルで復活させようとしていました。

ポケットを探れば、パナシアボトルが眠っています。

しっかりと握り、取り出しました。

あの時は、失敗しました。

理論が間違っていたのか、パナシアボトルでは力不足だったのか。

ただ、一度失敗したからといって、今度も失敗するとは限りません。

ダメでもともと。フタをゆっくりと開けて、土に流し込みました。

液体は土の中へ、中の奥へ、染み渡っていく。

「

」

茨が鳴いた。甲高く。人には聞き取れないほど高く。鋭く。のども
ないのに。茨の森はなき出しました。

あまりの唐突さにエステルは足を一步引いてしまいます。

うねる。うねる。うねる。うねる。

バラバラは指揮者の居ないオーケストラ。

あまりの痛さに身を、蔓を、よじります。

よじると蔓が動いて、棘に引っかかれます。

つるには神経が通っているのか、またも身をねじらせます。

あるいは絃が切れたようにツルが跳ねて、それが頬を切るように蔓に傷を作ります。

そうして、また、傷を、痛みを増やしていくのです。

熱されて溶け始めたホルンのよう。

無限のダカーポ。それはさながら無謀にもここに挑んだ挑戦者共の再演。

かつて何度も与えた罰を返すように。幾度となく犯した罪を清算するように、茨は傷ついていきます。

鳴く。喚く。絶叫。一輪だけの阿鼻叫喚。

それでも傷は消えていく。再生ではなく消滅。本体が消えていきます。

端から端から灰に変わって、霧の中へ溶けていきます。

やがて、茨は完全に消え去りました。

何の誉れも無く、ただ苦しみがあるだけで、消えていきました。

「あ
」

エステルはしばらく反応ができませんでした。

茨で隠れていた城が姿を現します。

古いお城です。

高いところには風見鶏。

支えの無い、風見鶏。

風が無いため、回ってはいません。風があっても回ることはありません。

エステルは明らかに不自然な風見鶏を気につけられないほど混乱していました

「ああ
」

そうだ、あやまらないと。

あやまって許してくれないでしょう。何の償いもできはしないでしょう。それでも、消してしまったことを謝らないといけません。

エステルはこの茨の飼い主がいるであろうお城へ歩いていきました。

■

お城の中は埃が敷き詰められていました。

照明はついていないので薄暗いです。人がいないのでしょうか。

「あのー。誰かいませんか」

右へ左へ目を向けながら、大声で人を呼びます。

返事はなく。その代わりではないのですが、ただ入り口の扉が閉まっただけでした。

城の中を探索します。

乾いた足音が響きます。

廊下には人形がありました。

人間大の人形がありました。

いくつもいくつか無造作に。

何気ないポーズをとって止まっています。

まるで写実画の中みたい。

動きの途中で止まっています。

床と同じで頭には雪のように埃が積もっています。

人間そのものだけど人間じゃない。

触ってみても脈がない。体温もない。ただ硬い。

でも、もしかしたらディスペルか何かで回復したら動き出すかもしれません。

エステルはためらいました。

茨、茨

暴れまわったのた打ち回った茨

もし、ディスペルをかけて、この人形たちがあの茨のようになったのなら。

そんなものは見たくありません。

人間にそっくりなソレが火に覆われたように痛みで踊る姿なんてとてもとても

万が一人間だった日には、もはや考えたくもありません。

エステルは止まることなく城の中を歩き回ります。

迷わないように左に沿って。

角を左に曲がり、長々と続く螺旋階段を上って、離れの塔の一番上

へ。

古びたドアを真新しい手袋で開いて、小さな部屋に入ります。

中には、黒いローブに黒いフードをかぶった人とベッドで眠っているお姫様がいました。

これも人形なのでしょうか。

フードの人は壁に背もたれ床に腰掛けています。

手には長い棒が握られていて、先には青白い金属片がついていました。

お姫様は、この暗い中でも輝いて見える、200年ほど前に流行った豪華なドレスを着ていました。

フードの男が侵入者に気づき、首をドアへ傾けます。

エステルは驚きました。まさか生きた人間だったとは。

「え、

と」

何を言うべきか、まったくおもいつきません。口をパクパクするだけです。

フードの顔が完全にエステルに向いたとき、エステルはさらに驚きました。

フードの中からはみ出た顔は、

「ユーリ？」

ユーリでした。そのカラスの濡れ羽のようにつややかな長髪。少し釣り上がった小さな目。

スラリとした痩せ型の体は、彼女の中のユーリの姿と完全に合致していました。

「ユーリ？原宿不利？いやいや、俺はしがない魔法使いさ」

おかしいことに、ユーリはユーリと同じ声で、ユーリじゃないと否定しました。

ふざけているようには見えません。

きっとユーリではないのでしょうとエステルは確証なく確信していました。

「それで、こんなところになんのようだ」

「あの、ごめんなさい。茨を枯らせてしまいました。」

エステルは早口で頭を下げます

「何？」

ユーリにそっくりな魔法使いは…めんどくさいのでユーリと呼ぶことにします…目を細めました。

そして顎を引いてぶつくさしゃべりだしました。

「えーと、だから、あの、その」

エステルは謝った後のことを考えていなかったようで、口がこちらに迷っています。

「まあよ、ということとは、でも女だよな、」

一方、エステルの言葉なんて全く引つ掛けず、ユーリは思案にふけています。

しばらくすると、ユーリは「よし」と手をつつて。影のようにエステルの目の前に立ちました。

「つまり、君は茨を壊した罰をうけたいのか」

「いえ、あの、できれば罰なしで許して欲しいんですけど」

「ならば、少し私に協力してくれないか」

「いえ…はい…あれ？」

どう答えたらよいものか考えあぐねているうちに、エステルはユーリの瞳の中へと引きずり込まれていきました。

グニヤリとした世界でした。

広い海の上から高い山。

長い宇宙に覆いかぶさる小さな原始の群れ。

ひとことで言い表すとカオスでした。

ペイントボールを投げつけられたかのように光景の上に光景が塗りつぶされていきます。

ここにいるのは、エステルと、ユーリと、先ほどベッドで眠っていた女の子でした。

エステルは、昔話に出てくる王子様のような格好をしていました。

ユーリは髪を後ろで束ねていて、黒いドレスを着ていました。

そして女の子はカロールそっくりでした。

「
」

ひとまず動こうとして、動けませんでした

体の自由が利きません。

体は勝手に動きます。一歩前に踏み出しました。

「おお、なんと美しい姫なのだろう」

演劇役者のような口ぶり。

女の子は喜色満面で喜びます。

「私と結ばれてくれませんか」

いつか誰かに言う予定だったセリフを前倒しで出てしまいます。

「はい喜んで」

女の子はドレスのすそを上げ、エステルに向かって歩いていきます。

エステルは女の子と対することなくユーリを抱きしめました。

女の子の体が凍りつきます。

信じられないと顔を歪ませます。

な　　ん　　で　　と唇が象りました。

ユーリは悪い顔で言いました。

「決まってるだろ。お前が餓鬼だからだよ」

女の子はうつむきました。手のひらは震えています。

しかし、それも束の間、女の子は手を握り締めることで震えを抑えました。

「　　や　　る　　」

声の震えもやがて止まります。

栗色の瞳に真つ赤な炎が燃え上がっていました。

「きれいに……なつて……やる。そして、アンタからその王子様を絶対に奪い取ってやる」

ユーリは悪い魔術師のような笑みを浮かべます。

「ほう、では、君は二百年の眠りから覚めて、明日に向かうわけか」
一瞬で、女の子の目の前に現れます。服は先ほど着ていた黒いロ―プ。

エステルを抱きしめているのは精巧な人形に変わっていました。

「ええ、そうよ。私は明日を欲するわ」

はつきりとした決意。封印を解く天使の一言。

「承知した」

ユーリは背中から黒い棒切れを取り出します。

いいえ、棒切れではありません。金属片が三日月を半分に切ったような曲線を描いてのびています。あれは、鎌です。

そうとも、彼は死神。死を司る魔法使いさ。武器に向かない大きな鎌は、れっきとした儀式道具よ。

そして、ユーリは、大きな鎌を、そのまま、振りかぶり、刃は、女の子へと――

女の子は黒い風となって、空へ消え去っていきました。

エステルとユーリが取り残されます。

「悪いな。つきあわせちまって」

「えーと、女の子はどこにいつてしまったんです」
エステルは戸惑うばかりです。

「ああ、彼女は、天国にいったよ」

「え？」

エステルの戸惑いはさらにエスカレートしました。

「厳密には、起きて、反動で一気に老化して、老衰で死んだってとこだな」

戸惑いは最高潮に達します。

――わたしがここにこなければ

もう、なにかもがわかりません。

――わたしがここにこなければ

そもそも、わかってはなりません

―わたしがここにこなければ

わかってしまったら、うけいねなければなりません

―彼女が死ぬことはなかったのに

お姫様が死んだのは自分のせいだということを

「あ　　つ　　」

あまりにも頭が痛くて、涙が流れました。

押さえるべきは、鋭く痛む頭でしょうか、それとも嗚咽を吐き出し
そうな口でしょうか。

「気に病む必要はないぜ。そもそも、ヤツが魔術師でもないのに呪
いをムリヤリ百年も延長したあの時から、これは決まっていたこと
なんだからな」

そんなものは、責任感の強いエステルにとって、なんの慰めにもな
っていませんでした。

「いや、だからさ、王子様のキスじゃなきゃいやだって言っただ
よ。だからアイツの自業自得―。いや、利用したのは悪かったし、
茨の件も不問にするから。だから、な」

ユーリはエステルを慰めますが、エステルは泣き止みません。

困ってしまったユーリさん（仮名）。泣いた女の子を放っておいて
このまま帰ってしまうのは、己の矜持が許しません。

まだ言えることが一つ残っていますが、それはちょっと気恥ずかし
いです。

ユーリはため息をついて、諦めという名の覚悟を決めて、口を開きました。

「ありがとう」

「え・・・」

エステルは、ほうと、顔を上げました。
涙は、止まっていました。

「アンタのおかげで、俺はやっとここから出ることが出来る」
ユーリはエステルのおかげで救われたと言った
その言葉は果たして本当のことか。

ただ、エステルの心の荷が少しだけ軽くなったことは本当の話。

「じゃあな」

軽い調子で手を振って、ユーリは窓から飛び上がります。

エステルはあわてて窓から空を見上げます。

霧はいつの間にか晴れていました。

高く青い空の中心に浮かぶ黒い点。

どんどん小さくなっていつて、やがて見えなくなりました。

いつまでも、いつまでも、エステルは空を見上げ続けました。

「ああ、そうそう、その城ぼろいから気をつけろよ」
空から声が降ってくるまでは

ピキッ

何かが割れるとても危険な音がするまでは

さて、もともと古い城。眠ったまま保存されましたが、呪いの延長を解いた反動で、一気に百年分老朽化しました。

問一、百年もの間、手入れを一切されなかったお城の耐久性はどれほど低くなっているでしょうか

A 崩れるほど。

問二、では、そこに乗っているエステル嬢はどうなるでしょうか。

A 落ちる

「きゃあああああああああああああ」

エステルは崩れる部屋と共に落ちていき、叫び声だけがその場に残されました。

「はっ………あれ？」

気がつけば、そこはいつものエステルの部屋でした。

「ああ、夢だったんですね」

椅子に座ったまんまで、腕を枕にして眠っていたようです。目の前には、昨日遅くまで飛んでいた本が眠っていました。

窓を開けて、さわやかな風を入れて、眠気を吹き飛ばします。そして軽く腕を伸ばします。

「今日もいい朝です」

「エステリーゼ様。朝食の準備が整いました」

「はい。わかりました」

エステルはいつものようにトテトテと部屋の外へ出て行きました。

ある、穏やかな朝の光景。

風に吹かれて、本のページがパラパラと捲られます。

ページが止まります。真ん中に、黒い羽が挟まっていたからでしょう。

それは物語の最後のページ。

たった二行の文面にはこう書かれていました。

『こうして、わがままなお姫様に捕らえられていた魔法使いは、王子様によって助けられましたとさ』

『めでたし　めでたし』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0301s/>

いばらのもりのねむりひめ

2011年10月8日21時06分発行